

戦後台湾の青少年出版物の研究

—— 初期の『南一中青年』の状況について ——

高橋明郎

0 導 言

国民党は、青年の教育現場での管理を重視した。このため、各種学校には軍教が派遣され、それは中高等教育での軍事訓練や生活指導を主たる業務としながらも、同時に知識層である教員の思想や授業内容を注視する役目も担っていた。また定期出版物も青少年の思想誘導の重要な道具であった。

加えて、国民党系の反共抗俄救國団（以後「救國団」）は、雑誌『幼獅』を発行して高等教育の学生の思想教育を図った。更に義務教育延長に伴い、『幼獅少年』を刊行した。

終戦後青少年向け雑誌は、概ね次の形態が考えられる。

1) 政府関係の団体が中央で発行するもの

例えば国民党系の反共抗俄救國団（以後「救國団」）は、雑誌『幼獅』を発行して高等教育の学生の思想教育を図った。更に義務教育延長に伴い、『幼獅少年』を刊行した。これらの雑誌の役割について、筆者は既に幾つかの論考を発表した。⁽¹⁾ これらが、いわば中央の意思を体した媒体であった。

(1) 「『幼獅少年』創刊の時代」(『香川大学経済論叢』vol. 84-4, 2012. 3) 「『幼獅少年』創刊期の記事と作家たち」(『香川大学経済論叢』vol. 85-4, 2013. 3) 「『幼獅少年』創刊の時代－『幼獅少年』初期の編集」(『香川大学経済論叢』vol. 86-4, 2014. 3) 「台湾の政治・社会と少年雑誌編集～民國 65～70 年代の『幼獅少年』を例に (第一部)」(『香川大学経済論叢』vol. 87-4, 2015. 3)

2) 政府関係団体の地方支部、もしくは地方政府が発行するもの

救國団はやがて台湾の各地分部で、その地域の中等教育学生を対象とした文芸誌の刊行を開始する。これらの雑誌も発刊当初は極めて政治性が高いものだったことを、台南市区で発行された『南市青年』をもとに分析した。⁽²⁾この『南市青年』も、投稿者、編集者などは当地の人物ではあるが、救國団という中央に繋がった組織の出版物である。

3) 各学校の発行する刊行物

学校の種別によるが、基本的には学校で編集作業を行い、学内者が執筆するものであり、所謂「校誌」である。本来は1) 2) より中央の影響を受けないものであるが、読者の範囲は当該学校関係者に限られる。

4) 一般の商業性雑誌

ある程度の発行部数を見込まなければならないので、魅力ある記事に最も注力する媒体ではあるが、特に1990年くらいまでは、出版そのものが政府の強い統制を受けていた。

これら4種のうち、1) 2) については実例分析対象として扱ったので、本論文では3) に該当する出版物を扱う。

今回材料とするのは台南市の台南一中の校誌である。

台南市には省立（現在は国立）の中等教育の伝統校が幾つかあり、いずれも日治時代の旧制中学に淵源を持つ。即ち、一中、二中、女中である。中学が義務教育化される以前は、これらは小学校卒業後の進学先であったが、中学の義務教育化に合わせ、現在では高級中学（以下「高中」。日本の高等学校に相当）相当の学校である。台南一中（日治時代は州立）は、もともとは、現在の台南公園脇、公園北路沿いであって、近隣には日本時代の官舎区、兵器工場、そして西部幹線を渡るとすぐ陸軍衛戍病院（現在は国立成功大学の力行校区）など

(2) 台湾の地方青少年出版物の機能 - 『南市青年』と政治記事（『香川大学経済学部研究年報 56』2017.3）

の軍施設があった。太平洋戦争が終結し日本の官民施設の接收後ほどない民國34年(1945)12月に、州立台南二中の校地(現在の成功大学勝利校区の向かい、勝利路沿いの校地)と施設を整備して学校ぐるみで移転した。旧一中の校地は現在台南二中となっている。⁽³⁾

本論文では、まず民國55年(1966)前後までの校誌を対象に、雑誌の内容、編集方針、そしてそこからうかがえる当時の校内事情について整理したい。

1 『台南一中校刊』

『台南一中校刊』は小冊子であり、民國36年(1947)1月に、省立台南第一中学校刊編集委員会の編集で刊行された。

なお、戦後の省立になって間もないこの時期は、日治時代の4年制旧制中学制度を引き継いでいて、中学1年から高校2年までが在學生で、全校で277名(すべて男子)が在學していた時期である。⁽⁴⁾1クラス50~55名で、中学1年が5クラス、2年が4クラス、中学3年高校1年が3クラス、高校2年が2クラス編成だった。

数か月で校舎を修復すると600名に學生数は増加。34年度の第2学期(1946年春節後からの学期に相当)、もともと3クラスの4年生は(日本人は終戦により日本に帰国させられたため學生数はこの時期定員より少なくなっている)規定通り卒業させると同時に、残りの3学年の學生については北京語の集中講習を一律に課し、中国本国の教育を受ける準備を行った。加えて1年生の予備と

(3) このような複雑な事情から、現在の台南一中を、日治時代の一中から繋がるものとして述べる、名称を基準とした捉え方と、もともとの二中で名称が変更されたという、校地を基準とした捉え方がある。『南一中青年』78号に校史として記されているのは、大略「民國11年(1922)4月1日台南州立台南第二中学が5年制2クラスで開始、民國15年(1926)10クラスに拡大される。民國28年(1939)は1クラス増加、民國32年(1943)太平洋戦争の戦況悪化で4年制に短縮、この時期に校舎も爆撃などで損害を受ける。

民國34年(1945)終戦の年、12月14日に蘇惠鏗が校長として学校を引継ぎ、設備の再建を進め台湾省立台南第一中学と改名、10クラス約500名の學生でスタートした。」(下線部及び西曆追記筆者)という書き方であり、これは明らかに前者の立場に立っている。

(4) 旧制中学は本来5年制だが註(3)のように戦時下統制で4年制に変更されているため、終戦後の再開時は在来の4学年に新生を加えて5学年が在籍していることになる。

して3クラスを設定し、民國35年度までに、三三制（初級中学3年、高級中学3年計6学年とする）となり、民國38年（1949）に省立台南補習学校を接收して一中附設補習学校とした。

1.1 発行の経緯

創刊号の「徵稿啓事」から、発行の経緯と編集方針を知ることができる。この校誌は蘇惠鏗校長の指示で、民國35年（1946）12月月刊定期出版物として『南一中校刊』⁽⁵⁾を発行する。主旨は①学術・教学上の問題を取り上げ教育効果を上げること ②国語学習への関心を高め写作能力を向上させる ③本校の設備や活動を伝え、外部の教育機関と連携を取る ④OB、保護者、生徒、教職員に情報を提供して愛校の意見を受ける。したがって毎月1日発行、現教職員、生徒、OB、保護者から原稿を募る。

投稿要領については以下の通りであった。

○内容

1 論著 2 学生園地（詩歌・小説・散文・随筆・遊記、読書報告、その他習作） 3 校内ニュース（校聞） 4 OB 情報（校友通訊） 5 保護者情報（家長消息） 6 生活写真、木版漫画

○原稿は北京語が原則

○短編が望ましく、最大でも3千字以内、原稿用紙に記入。

○ペンネームの使用は差し支えないが、応募原稿末には実名を付記すること。

○原稿掲載の際は、当該号を一部贈呈。

○原稿は台南一中校刊編集部宛提出。

○締め切りは毎月22日

○編集の際改訂することがある。これを許諾しない場合は予め申し出ておくこと

(5) 原文は「二五年」としているが明らかに誤植である。

1.2 創刊号の内容

さて、創刊号については、実際の内容は次のように大分される。教員の論文、学生の文章、近況、諸規則、同窓会情報である。当然投稿制ではなかったの得上記投稿内容2に相当するものは、学内行事で別途選ばれたもの以外はない。

巻頭には戦後の一中接收時（民國34年11月）蘇惠鏗校長が最初の職員会議で述べた訓示「我們的工作和任務」が取られている。

1.2.1 論文

教員の論文はいずれも国語関係で、呉乃光「論臺灣當前的教育及語文教授」は北京語修得の重要性を確認しながら、一方で当時の教材があまりに政治面を重視して、文章を書いたりする学習面が蔑ろにされている、そうした教材は、内容は重要だが文章としては完成度が高くなく、また専門用語などにもほとんど注がないため、教学の障害となっていることを指摘している。また秦一飛「國文教學的目標」は当時学校が抱えていた喫緊の問題に関するものである。その問題とは、ほとんどが既に日本語教育で小学校課程を修了しているという学生であり、これに対して北京語を習得させなければならないということであった。それは各級学校共通の課題であり、学年が上であればあるほど日本語修得を積み重ねており、転換が困難になっていた。中国本土の教育との比較の上で、秦は、漢字の習得自体は日本時代も学習しているので大きな障害ではないが、毛筆の教育は遅れている。また3年以内に北京語を不自由なく使用できるよう教育できるとしている。

1.2.2 学生作品

学外のコンクール優勝作。これは当時台南三民主義青年団中等学校分団の各種コンクールに台南一中から応募して受賞した作品で、以後の手本となるよう原文のまま掲載されている。演説の部は、「希望臺灣同胞能努力學習語文」と「建設新中國」作文は「立身與報國」で、これらの頻出語は「三民主義」である。主催団体の目的に沿った内容なのは言うまでもない。このほか、読書報告は

陳建夫の文章を題材にした「關於“論人生苦樂”」，時事テスト高得点者解答⁽⁶⁾，書法などが紹介されている。

1.2.3 校内状況

これについては訓導処の記録の形で示されている。戦後間もなくの校内指導の例として、次に抜粋しておきたい。

- 9/1 保護者会，生徒指導の報告があり，また制服について協議された。
- 9/5 始業式，その後大掃除
- 9/10 模範学生（値星）の訓話。その後，生徒指導関係会議。
- 9/12 意見箱の設置
- 9/14 夏季キャンプ参加者が全校生徒への体操の指導を開始
- 10/10 市主催の國慶節大会参加，夕刻から提灯行列
- 10/16 第1回学級会で学生公約などを討議
- 10/21 校内国語コンクールの各クラス優等者及び全校第1位発表。
- 10/23 午後世界戲院で時事映画鑑賞。2元
- 10/25 延平戲院で学芸会
- 11/30 台南駅から貸切列車で遠足（当時の国語では「修学旅行」）初中1，
2年は虎頭碑，初中3年～高中2年は烏山頭と嘉南大圳，運賃はそれぞれ10，16元。
- 12/5 會議室で三民主義青年団台南学校分団青年服務隊台南一中中隊成立式典。
- 12/6 校長以下大地震被害地区に向かい被災学生調査⁽⁷⁾
- 12/11 講堂で校内国語スピーチコンテスト

(6) 問題は選択式と穴埋め式がある。それぞれ二問程度例示しておこう。(p8)

*漢奸陳公博受國法裁判、結果是：1) 宣告無罪 2) 處有期刑 3) 死刑。*本屆召開國民大會的地點：1) 上海 2) 南京 3) 北平 4) 重慶 *法國內閣於本日改組後由…(社會民主黨執政・內閣總理是勃魯姆) *參加本屆國民大會的黨派有…(國民黨・青年黨・民主同盟・無黨無派・民盟黨・社會黨・進步黨・此外還有共產黨而其未派代表參加)

下線は正答もしくは解答。

(7) この地震は台南地震で，一中では中学3年の生徒の家族3名が命を落としている。

- 12/12 延平戲院で「聯合國ニュース映画」鑑賞。2元。
- 12/15 三青团台南中等学校分団主催の青年学術コンクール。国語高中第二位，初中第一位，書道，高中初中ともに第一位。
- 12/18 生徒指導教員会議。操行点の計算などを討議。
- 12/19 教育部台湾教育視察団が授業などを視察。同日教科ごとの会議。

1.2.4 留学関係

消息の中に、中国本土への私費留学生募集が出ているが、定員は台湾全土で300名、北京語で授業を理解できるもの、かつ出発前に省内で訓練を受けることが要求されていて、中国本土に台湾の学生を出すことへの緊張が垣間見えて興味深い。また、この時期中国本土への進学は、まだ「留学」と意識されていたことも明らかである。この2年後には大陸との往来が不可能になってしまうので、その意味でもこの創刊号の記載は興味深い。

1.2.5 図書資源

創刊号の記載から、戦後の図書状況と、接收後の整理方針が窺える。

図書については、接收時には中国語の書籍は皆無で、日本語図書1千冊のみだった。このうち皇民化運動に関係すると判断された書籍は封印、残り600冊を参考用に残した。創刊号時点では、蔵書は1,087冊（中国語335、日本語665、英語55、図表32）で、新購入図書は463冊である。新聞は「新生報」、^{ママ}「中華日報」、「大公報」、「大明報」、「國是日報」、「人民導報」。雑誌は『新台湾画法』『図書月刊』『教育通訊』『^{ママ}総Lihe』『青年生活』『化学世界』『電世界』『文潮月刊』『改造雑誌』『觀察家』『西風民主世界』『内外要聞』『農校刊』『中央週刊』『國文月刊』『中学生』『開明少年』。

言語切り替えが必要な時期に、中国語の書籍が十分ではないので、学校側は、上海商務印書館の萬有文庫1揃を発注、翌年の1月には届く予定と記している。

最新購入図書の一部が示されているが、この中で目を引くのは坪内逍遙訳のシェークスピア全集が、日本語書籍ながら購入されていること、そして矛盾の

『子夜』や巴金の『家』『春』『秋』という、数年後には親共産作家の作品として禁書となるようなものもこの時期は購入していたことである。

1.2.6 近況記事

学芸会は、校長の中国語の挨拶に学生をはじめとする来場者が耳を傾けていたことが特記された。⁽⁸⁾これは言語切り替え時期の学校の姿勢を示すアピールであろう。二曲の抗戦時期の歌（『長城謡』『没齒難忘仇和恨』）が心を打ったこと、体操演技が耳目を奪ったことが記されている。

1.2.7 学内規則

この号は、新体制で学校が再出発した時期のため、新しい学則の草案が付されている。総則第1～第2条、課程第3～4条、訓育第6～第11条なのに対し、成績考査については第12条～第40条まで、実に30条弱に及び評価基準なども含め相当詳しく示されている。⁽⁹⁾成績は学業、操行、体育の3分野で評価されるのだが、操行の評価基準は次の6基準が挙げられている。

- ① 國父記念週行事と国旗掲揚礼の参加状況
- ② 青年守則の順守状況
- ③ 校訓の順守状況
- ④ 礼儀が学校の要求に適っているか
- ⑤ 学校の指示する服務作業の達成度
- ⑥ 校則の順守状況

この号は計22ページで、印刷費は5元となっている。

この校刊は、最後まで跡どれ無いのであるが、次節で扱う『南一中青年』に共

(8) 「校長致辞時、聲音洪亮、發音清晰、懂國語之來賓的側耳靜聽。」(首屆游藝會花絮)

(9) 例えば、学業に関しては平常点（日常の提出物や授業内で行うことが義務付けられている臨時試験など）が3/5、期末試験が2/5で算出されること、学期の成績は、各科目の点数に毎週の各授業時間を掛けたものの総和を1週間の総授業時間で割ったものを成績とする（学則21、22条）。

通する内容は少くない。また、刊行されたのが光復の1年半後、つまり中国大陸に中華民国政府が存在し、しかも228事件の1月前と言うタイミングで、外省人と本省人の対立は進行しつつあったとはいえ、決定的な対立が顕在化する前であることから、戦後の多くの青年向け刊行物が踏み込まざるをえなくなる、反共、大陸反攻、総統の個人崇拜といったトーンは逃れていて、その意味でも貴重な資料である。

2 『南一中青年』

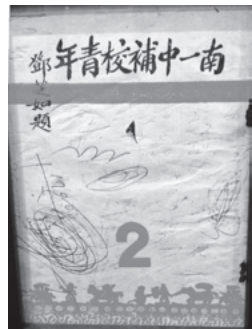
戦後発刊された『校刊』は、資料としてあまり残っていない。何より創刊号出版の翌月228事件が起こり戒厳令施行、その後国民党の敗走による中国本土の喪失などで社会的に非常に不安定な時期に入り、言論規制も嚴重なものであった。政府系機関と云ってよかった救國団の『幼獅』も、創刊するのは民國41年(1952)になってからである。

2.1 創刊

この間の一中校内での出版物の動きを跡どれる資料はほとんどないが、民國43年(1954)1月に『南一中青年』が刊行される。初期のものは今日揃っていないが、第37号からは、ほぼ現在も見ることができる。これを『台南一中校刊』の直接の後継と言う記述は、現在調べることのできる資料の中にはないが、一方で50号に見える「台南一中唯一の出版物」という記述が、後掲載される文章に見られること、開校当初の学則案などを除くと、投稿規定で示されるものがほぼ類似していることから、実質的には『台南一中校刊』の役割を引き継いだものと見なしてよい。⁽¹⁰⁾

(10) なお、併設された附設補習学校にも同様の校誌があった。資料を精査できないため本論文では、『南一中補校青年』という校誌も存在した点だけここに記しておく。

『南一中補校青年』表紙
(筆者撮影、台南一中蔵)



民國 46 年（1957）1 月 1 日発刊の『南一中青年』37 号は編集後記に「創刊後 3 年の歴史がある」と記載されていることから、創刊は上記の通り民國 43 年（1954）、しかも 37 号から号数を逆算すると 1 月で、『台南一中校刊』が目指していたようにここまで月刊で発行されていたことがわかる。

しかし、この年以降、月刊ではなくなる。2 号後の 39 号の発行は民國 46 年 7 月である。これ以降、かなりの期間年 4 回の刊行がほぼ固定化してくる。

即ち春に青年節特集号、夏に卒業記念号、秋に蒋介石總統生誕紀念日特集号、冬に校慶特集号である。例えば 43 号奥付には、わざわざ「月刊」と書いてあるのだが、⁽¹¹⁾ 実質は季刊になっている。このうち、春と秋は青年節である 3 月 29 日と蒋介石の誕生日である 10 月 31 日という固定日時だが、夏は 6 月後半から 7 月頭、冬は 12 月か 1 月 1 日と言うように、発行日に若干のずれがある。

この時期の一中がどのような時期であったか。これも 78 号掲載の「校史」に従って記述するなら、民國 45 年（1956）蘇惠鏗の前任者だった鄧芝如が校長を引き継ぐ。この時点で高中 13 クラス、初中 23 クラス、1,900 名の学生がいた。新校長は図書館、博物館、理化館、文地館を整理し、また 25 教室や教職員宿舎を整備した。民國 49 年（1960）教育政策の一環として科学教育実験センターに指定されると、校長は日本に視察に出掛け、民國 50 年（1961）に新型科学館ビルを落成させた。

民國 50 年（1961）年度学期から、高中は台湾省、初中は縣市が管轄するという制度改正により、中学生募集を停止するとともに、台南市立中学の高中部 3 年生クラスを受け入れた。一方で民國 48 年（1959）秋から、空襲に備えて台南縣新化に分部を設置して、高中のクラスのみ募集した。こちらも生徒増に合わせ、省の資金協力も得て新化では新校舎建設を計画、運動場なども整備して民國 55 年（1966）夏に、独立して省立新化高中となった。

(11) 63 号に、「南一中青年與我」という南一中社 OB の文が取られていて（p53）、その記述からもこのことが裏付けられる。即ち、創刊時は 1 枚刷りで半月に一回発行されていた。37 号以降は単行本化、40 期から 1 年 4 回発行となった、というのである。

民國 53 年（1964）冬に鄧校長が任期中に病逝したため、民國 54 年（1965）金樹榮が後任として発令される。この時点で 54 クラス、学生数 2,944、附設補習学校は 18 クラス、学生数 782 であった。

2.2 『台南一中校刊』との異同

教員の編集委員会が発行した『台南一中校刊』との異同を、まず見ておきたい。

第一に発行者が編集委員会から、中國青年反共救國団台南市市隊台南一中大隊という救國団組織に変更されていること、加えて編集業務は「南一中月刊社」という社団、すなわち学生サークルに移管されている点である。民國 47 年（1958）3 月発行の 43 号以降は、更に「中國青年反共救國団直屬省立台南一中大隊」と傍点の字が付加された。民國 52 年（1963）62 号に至って、発行者は「中國青年反共救國団台南市台南一中團務委員会」と微変更される。

第二に懲稿は「論文、散文、詩歌、生活小品、短編小説、學術研究、讀書心得、翻譯作品、生活雜記など、白話・文言いずれも可だが 3,000 字以内。採用作には薄謝進呈で、大体は『台南一中校刊』と合致している。

第三に、実際の内容は、校長の文、學術論文、特集、文芸、古典詩の転載、月間の学校関係の記録で、『台南一中校刊』にあった規則面と同窓会関係は外れている。また「文芸を愛好する青年の園地」を標榜して、一般的広報誌から文芸方面主体の雑誌になっている。全体も三十数ページに増え、商業広告も含まれている。

一方、救國団が表に出ていることで、「總統訓詞」が記録されているほか、特集として蔣介石の「告全國同胞書」に関する分隊での討議結果が掲載され、裏表紙は「国防体育」の発表や、閱兵行進、閱兵式の写真で埋められている。

2.3 内容

目次の分類は一定のものではない。たとえば、目次分類は、37 号が「校長的話」「學術講座」「本刊特稿」「元旦特輯」「弘暁文芸園地」「詩歌之頁」というもの

だったが、39号では「社論」「特写」「青年文壇」「詩集」となっている。ただ、本論文で扱う時期については概ね構成が一貫しているのので、以下見てゆくことにする。

2.3.1 中国関連記事

『南一中青年』創刊時、中華民国政府は既に大陸から台湾に逃れた後で、当然中国の扱いは、いずれ回復すべき祖国であり、「共匪」により蹂躪され、人民が苦しんでいる場所というものである。

この時期の『南一中青年』の記事を、その視点で見ていく。

40号では、時事論文として「論我反抗大陸必能獲勝且不致引起世界戦争」(沈某)、「蘇俄在中国読後感」(孫某) 転載論文として「共匪「反右派闘争」先向青年開刀」(柳園)が掲載された。また裏表紙は大陸済南、泰山を描いた絵になっている。

43号は青年節特集号である、表表紙に72烈士記念碑の写真、裏表紙は広州の錦河(広州の古刹六榕寺塔から遠景を写したもの)と広州の中山紀念堂の写真になっている。表紙裏は軍訓の写真で、「時代的青年 反共的十字軍」とキャプションがつけられている。この号は62ページだが、約3分の1が青年節解説などで占められている。また「今日的大陸青年」あるいは「悼大陸反共青年」といった文章も含まれている。

上記「今日的大陸青年」は4、5か月前に大陸から台湾に逃れてきた郭某という生徒が記したものである。

この文に描かれた中国を略述すれば以下ようになる。

大陸では受験に失敗すると酷い前途が待っている。すなわち新疆など西北部の農村に割り振られるかもしれないからだ。宿舎にはダブルベッド使

(12) 本誌掲載の文章は、公表され、また作者は匿名にしたければ筆名も許されているという前提で書かれているものであるとはいえ、配布先が一中関係者に限定されていたことに鑑みて、学生についてはこの表記法を用いる。筆名及び学生以外の筆者についてはそのまま記述する。

用で十数人から 30 人が詰め込まれ、もし宿舍の状況改善を求めると、学校側に「思想的に問題がある」とみなされるため、黙っているほかはない。食事も単調で、油は非常に少量、それでも共産党幹部は、市民や農民はもっと少ないのだから学生は優遇していると言う。授業面では伝来の漢字を簡略化、ローマ字化して中華文化を破壊している。

政治学習も煩わしいもので、学校、團、党、学生は新聞を細心に読まなければならない。一日最低 1 時間で、これが重要な思想教育とされる。毎日会議があり、大会後の討議で発言しないと注意を受ける。

学校は「集団生活」を重視するが、これは友人との協力とかを指すのではなく起居食事まですべて一緒に行くことを意味している。娯楽は、例えば歌。これは「大家唱」という歌曲集（共産党を賛美する歌中心）をもとに、レクリエーション幹事が寮にきて学生を集めて歌うもの、ダンス（集体舞）は少数民族や農民の子供が踊る田植え歌のようなもので、単調であり面白くない。

國慶節と労働節だけはみな新しい服を着る。天安門前で学生たちは喉がかわれるほど領袖の名前を連呼しているが、これはナチスドイツのそれと変わらない。

生活は貧しく、農民が一年丹精した成果は共産党に差し出すことになり、そのあまりでは十分に食べられない。配給量は規定されていて、農村では一月に油 4 両、砂糖三両、布は一年 20 尺。都市部は明け方から市場に人が押し寄せ、10 時には売り物がなくなってしまう、また翌日行かねばならないので、人びとは痩せこけ顔色も悪い。労働者は 8 時間労働の他毎日 2 時間の政治学習が必要で、給料は非常に安い。

以上のように描写した後、自分は自由な祖国（つまり中華民国の事）で成長できて幸せだと思うと述べている。こうした編集は、反共義士のメディアでの利用法に相当する。

43 号は詩文も、政治的なものが多い。「我们的信心」は大陸の青年に呼びか

けるもので、「明日帰故郷」というタイトルの詩も、内容は大陸反抗を鼓舞する叫びである。「給大陸成年朋友的慰問信」でもあまりに陳腐なロジック、すなわちともに中華民族であり、黄帝の子孫であり云々といった文言が連なる。

45号裏表紙は南京の明の孝帝陵と玄武湖の写真。

47号では人民公社の暴政を暴露するという特集が組まれ、10篇の文章が有るが、ほとんどが「人民公社與幸福家庭」ということを含むタイトルがあることから、このタイトル、テーマでの原稿募集だったと見られる。転載論文も「匪人民公社向何處去」「共匪奴役青年學生」というものである。

以上のように、台湾と対立する共産中国への敵視は、この時期の基本的柱である。

国民党軍は文化宣伝部門を持っており、雑誌・新聞の発行のほか、文芸部門や写真、フィルム、音楽など様々な分野で市民社会への宣伝に努めた。⁽¹³⁾

76号には民國55年(1966)4月14日に國軍文化訪問団来訪記事が有る。目的は、文武青年感情の交流、國軍の文化状況の紹介というものである。そして当日の授業はすべて取りやめになった。

『南一中青年』の記述によれば、この行事は「映画鑑賞」「写真・グラフ展示」「テーマ討論」「交流活動」である。

上映された映画は8年抗戦のドキュメンタリー「中国之怒吼」で、東ドイツの記者が民國48年(1959)中国で撮影したものである。このフィルムで描かれているのは、人がまばらで挨拶する姿も見えない街、露天の小学校教室、そして小学生が指導者たちに従って繰り返しスローガン「我不愛爸爸，我不愛媽媽，我愛毛澤東」を叫ぶ姿、続いて人民公社でぼろぼろの服を着た農民が大鍋を囲んで車座で食事する様子、そしてこの人たちが銅鑼（驚魂鑼）がなると、その合図で農作業に行き、作業を終え、その後軍事訓練を受け、それが終わると、また農作業というのが延々続く。その後まだ夜戦訓練があるのである。こ

(13) 國軍の京劇部門（國劇団）は中華文化復興運動の中で活躍した。事例については、高橋「台湾地方都市の音楽生活－1970年代の台南を例に」（『香川大学経済学部研究年報』2017）を参照されたい。

の文の筆者はこうしたフィルムを見て、「翌年の10月10日は南京で式典を行おう」という決意を示す。最後の一篇は「学府風光」で、陸軍軍官学校、海軍軍官学校の宣伝フィルムであった。

次の資料展示は、「藝園天地」「越共暴行」の資料。これも、体験記に従って記述するなら、台湾の地下工作員が大陸で「農民青年」「抗暴報」という「地下報」を発行していてその効果について、それぞれ農民、一般市民を対象とした宣伝工具で、台湾が豊かで発展しているという情報を流すものだという。

また「艇上物件」と題されたのは、民國55年(1966)1月に中国海軍F131上陸艇が台湾に亡命した時押収されたもので、たとえば煙草は、煙草の葉が真っ黒で、加えて錫紙で包装されたものが無かったこと、マッチの軸が非常に細いこと、服は材質が粗末で、蚊帳も作りがいい加減でぼろぼろ、こうした日用品から生活レベルが低いことが窺える。海軍の軍服や帽子には徽章もなく、これは階級を廃止したことからなのだが、現実には高級幹部は贅沢をしている、としている。

また、「大陸風光」であるが、この時期の高校生は、「大陸淪陥前後幾年出生的」(76号p5)世代で実際の中国の風景についてはほとんど知らないわけで、このため天壇、万里の長城、中山陵、九曲橋など、いかにも中国と言う郷里の写真が展示されたようだ。

「大陸人民」の所では、身分証に民族名が記されていることについて、筆者は我々はみな中華民族で漢族だ何族だといった区分をすべきでないと非難している。どこに行くにも通行証が必要であり、食料は配給である。食材の目標は「平時吃稀、忙時吃乾、主雜摻半、節約用糧」着るものは「新三年、舊三年、縫縫補補又三年、拼拼湊湊再三年」暮らしは「一條破被十人蓋、男男女女分不開」という状況であること、文字も破壊されていること、「地主」「特務」などの精算闘争の末、それらの家庭の子女を婚姻処で共産党幹部に分配し、また、婚姻法の改正で、結婚ができるのが男子は22歳から28歳に、女子は18歳から25歳に引き上げられたことなど、共産党の非人道的政策にある人々と言うことを強調している。

学生たちは直接授業の代わりに見学したので言うまでもないが、こうした行事の内容が記事にされ、配布されることで、父兄や同窓会関係者にも國軍の活動、中国の現況などが宣伝できるわけである。

2.3.2 学内行事

校内の様々なコンクール、それはスポーツ、芸術、数学、英語、国語など多岐にわたっていて、その予定、結果は学内消息として掲載されるが、特に文芸などの分野は上位作品が掲載される。コンクールの半分は校内に閉じているものであるが、半分は学外コンクールの学校代表決定を兼ねている。

例えば63号告知から、当時の学内コンクールの種目がうかがえる。論文寫作比賽、壁報比賽、高中英文演講比賽、笑話徵稿比賽などが、人文関係では挙げられる。

76号(1966)には「總統與中國之命運」という論文コンクール優秀作が3位まで掲載される。こうした作文コンクールのシステムは以下のようである。中央で一種の政治的、思想的テーマを定めて論文コンクールをとする。各県市は、その代表を定める。県市代表を定めるために各校代表を集めたコンクールをする。各校代表を選出すべく、校内でコンクールを行う。校内コンクール応募作品のため、教員はテーマをもとに指導をする。結果が出れば、少なくとも校内優秀作は『南一中青年』に掲載され、また県市コンクールで同じテーマの作品が他校にも披露され、さらに中央での結果や優秀作は新聞などメディアを通して目に触れる。一つのコンクールは、同じテーマで各段階で文を書かせる、読ませる、できたものを配布するという形をとることで、結果的に文章の内容を嫌というほど宣伝する効果があるのである。⁽¹⁴⁾

(14) これは、別に文学だけでなく、たとえば、國樂コンクールや愛國歌曲コンクールを主催することで、応募者を集めこの分野の理解者を増やそうとするのも同じシステムである。实例については、高橋「台湾地方都市の音楽生活 - 1970年代の台南を例に」(『香川大学経済学部研究年報』2017)を参照されたい。

2.3.3 救國団等の学外団体行事との結びつき

上述のように『台南一中校刊』が学校編集・発行だったのに対し、『南一中青年』は救國団の校内支部が発行をしていた。救國団は、各学校に教官を派遣して、訓導、軍事的訓練を所轄するだけでなく、校内の思想の監視と誘導にも活動していた。

加えて、救國団は全国、もしくは地区ごとに、学生を様々な行事に連れ出していた。上で中国大陸の学生生活を「集団重視」としていたが、台湾の集団重視も相当なものであった。特に休暇期間に数多くのプログラムを提供する。当時の娯楽の少ない時期の学生たちにとっては、それでもレクリエーションの役割をも果たしていた。

中身は比較的多様で、軍訓のようなものから、スポーツ、音楽、そして文学などまである。今日でも軍訓はともかく他の研修は救國団の重点事業の一つである。これらの参加者は、主に秋・春の『南一中青年』でその体験記を書き、それを材料として次の休暇期の研修宣伝が自動的にでき、その参加者の体験記をまた掲載するという、極めて効率的な循環を形成していた。

49号では「戦訓文學隊文學組課程簡史」として参加した社員の文章が掲載されている。この講習は3週間で、中には詩人の覃子豪、高陽、作詞家趙有培、小説家王臨泰の講義、音楽・体育なども含まれた。⁽¹⁵⁾

また65号では夏休みの文学営に関する体験記がある。そこから、当時企画された内容を見ておきたい（林某「文藝研究隊半月」65号p59）。

この行事は民國52年（1963）の夏季休暇時に行われ、中國青年写作協會主催で、講師陣には王平陵・王臨泰・郭嗣汾・謝冰瑩らが講師陣に加わっている。

(15) 覃は民國元年（1912）四川省広漢縣生まれの詩人。日本の中央大学に留学した後、中国で新聞の編集などを行い、台湾では「自立晩報」の中で「新詩週刊」を作るなど詩人として活躍し、この49号が出た4年後の民國52年（1963）没した。趙有培は著名な「成功嶺之歌」など多くの軍歌の作詞でも知られ、民國88年（1999）ニューヨークで没した。王臨泰は民國8年（1919）江蘇省銅山縣生まれの小説家。柳青、雁明など何種かのペンネームを有した。中国では幾つかの雑誌を創刊し、台湾では中國文芸協會、中國青年写作協會の理事などを務めた。民國86年（1997）没。

散文の講義は、上にも名がみえる小説家の王臨泰。この講演で、同時代の代表的散文家として彼が挙げたのが張秀亞・牧羊女・徐鍾佩・鍾梅音・艾雯・蘇雪林・王肆均・劉心皇・林海音・茹茵・鳳兮である。

現代小説の講義は小説家の后希鎧⁽¹⁶⁾。この講演では、現代小説の意義を解説するとともに、中国人を描く時に絶対に西洋の心理学を援用すべきでない⁽¹⁷⁾と指摘。

世界文学の情勢については金瓶梅関連の多数の著述で知られる魏子雲⁽¹⁷⁾が解説。詩の本質として、詩人の鍾鼎文⁽¹⁸⁾が話した。小説の構造については、小説家の魏希文⁽¹⁹⁾が解説。

これら錚々たる講師陣は、ほぼ民國初年に大陸で生まれ、文学活動も大陸で行って、台湾に来てからは、北京語創作の言わば手本のように扱われ中央公認の文芸団体の要職を占めた人々である。これらは、以後の文学營参加記でも共通するように、参加者にとっては魅力的なものであり、一方で作品の内容をある枠に限定することでもあった。

もちろん軍訓参加記も少なくなかった。

2.2.2で示した國軍のプログラムには「文芸座談会」も含まれていて、まず、前年の國軍文芸金像獎受賞のスライドが映写された後、受賞者の一人が、新文芸は戦闘文芸だという話、蔣介石が國軍文芸大会で紹介した12項目こそがその眼目である⁽²⁰⁾といった話が出された。

(16) 后希鎧は民國6年(1917)雲南省西疇縣生まれの小説家。夏威というペンネームを持つ。雲南省やシンガポールで新聞、雑誌の副編集長などを務めた。民國90年没。

(17) 魏子雲は民國7年(1918)安徽省宿縣生まれの小説家で、從軍中創作もし、台湾で退役後高校教員などを務めた。中國青年写作協會の総幹事、民國94年(2005)没。

(18) 鍾鼎文は民國3年(1914)安徽省舒縣生まれの詩人で、京都帝大に留学歴を持つが、國民黨文宣部で活動、台湾では「聯合報」「自立晚報」の主筆を務めた。民國101年(2012)没。

(19) 魏希文は民國10年(1912)湖北省通城生まれの小説家で、軍系統の学校に奉職、台湾では、中國文芸協會、中國青年写作協會の理事を務め、民國78年(1989)没。

(20) 12項目とは1 發揚民族仁愛精神、2 復興革命武德精神、3 激勵慷慨奮鬥精神、4 發揮合群互助精神、5 實踐言行一致精神、6 鼓舞樂觀無畏的精神、7 激發冒險創造精神、8 增進積極負責精神、9 提高求精求實精神、10 加強雪恥復仇精神、11 砥礪獻身殉國精神、12 培育成功成仁精神。

2.3.4 政治

『南一中青年』初期において、政治的宣伝や蒋介石崇拜の刷り込みは重要な機能である。年2回、3月の青年節と、10月の蒋介石生誕記念号は、中でも重要な機会であった。

たとえば40号には社論「壽 領袖祝團慶」、鄧芝如校長の「慶祝 總統華誕 要実践 總統訓示」⁽²¹⁾がある。民國47年(1958)10月31日、つまり蒋介石の誕生日に発行された72歳慶祝の特集号。社論は、「72歳の祝辞」「時代青年的使命」の二編だが、後者は救國団の6周年を記念したものである。

49号では、蒋介石生誕を祝う文章の他、蒋介石の「現代青年成功立業之道」が転載されている。61号の社論は「如何慶祝 總統華誕」で、表紙は壽の字に、蒋介石の年齢76を記した桃というイラストである。63号では蒋介石の元旦発表の年頭文の感想が掲載されている。



45号61号蒋介石生誕記念号の表紙（筆者撮影、台南一中蔵）

(21) 本誌では、歴史的尊敬表現として、貴賓の上一字を空白にするという伝統的な筆記法を實踐しており、本論文でタイトル引用の際は、その表現形式のまま引用している。

71号は刊行の月、民國54年（1965）3月5日に没した副総統陳誠の追悼の文章が掲載されている。

60号以降、『南一中青年』には漫画コーナーが設けられる。この漫画はこの時期はストーリー性のものではなく、一コマものだったのだが、63号の漫画は、「中國幾十年來の歴史可以說中國青年的團結奮鬥史」として、青天白日の腕章を巻いた学生が、棍棒で「滿清」「閩軍」「日本」「共匪」と記されている人物を棍棒で殴っている画で、それぞれ「推翻滿清」「北伐統一全國」「抗日八年」「反共抗俄」が吹き出しとして書かれているものが一番に掲載されている。

64号転載原稿の内「高空騎士－陳懷生」は中華民國の烈士を描いた長文で、3号に分けて掲載される。

59号には「為發起反共自覺運動告同胞書」という臺灣警備總司令部が3月1日に出した文章が転載されている。この反共自覺運動は、共産党関係者を摘発するための運動で、この文章自体多くの媒体が掲載を余儀なくされたものだが、こうした校内出版物さえ例外でなかったということである。

70番代の号も後半になると、中華文化復興運動の時期を迎える。民國55年（1966）12月に刊行された78号では、当然「編前語」として、中華文化復興運動について一中也協調して進まねばならないという言葉が最初に置かれている。

このため、この号には褐某の「對文化復興運動應有的認識」という論文を掲載した。(p14)「為響應中華文化復興運動告全校同學書」も掲載されているが、(p16)これは当時の3年14組が投稿したものである。同様に3年8組は「談中華文化復興的意義」を投稿している。

校誌に発表されるに先立って、当然各クラスでの指導や解説があり、原稿を作るという行為自体が、この場合も政治運動の学習であり、広報になっていくのである。

2.3.5 文芸

もとより、『台南一中校刊』の時期から、一中の出版物には学生の作品が掲載

された。ただ、紙幅の制限を考えると、(創刊号は『台南一中校刊』としては大きな体裁をとっていたので、通常は更に余裕がなかったと見られる) 自由な投稿が掲載されたというよりは、校内外の論文コンクール、行事的な文芸企画での受賞作が中心だったと推測できる。

『南一中青年』の場合、『台南一中校刊』に比べるとかなり明確に文芸を掲載すること、それも投稿で広く募集することを前提にしていた。とはいえ、『南一中青年』が唯一の学校出版物とあっては、内容にこれまで見てきたような学校側の記事や進学状況、OBによる進学先紹介のほか、学術論文、政治情勢・国際情勢の紹介といったことも扱わざるを得なかった。非売品であるとは言え、出版規制の理由の一つが戦時体制下の紙の不足とされていた以上、商業誌でなくとも簡単にページを増やして文芸の比重を高くしておくこともできないわけである。

この結果、『南一中青年』は、この時期、内容のバランスについてかなり不安定な状態になった。それを読み取れる記事をいくつか示すことにしよう。

50号は民國48年(1959)12月の校慶特集。この号で高校2年の学生からの「本校唯一の刊行物」『南一中青年』への要求として次の事を述べている。

- ①每学期2回の発行は少ない、月刊化すれば情報も活用できる。
- ②文芸誌に近すぎる。編集者が文芸工作に従事している以上止むを得ないところはあるが、全部の学生が文芸に関心が有るわけではないので内容の拡大を。
- ③学術講座欄の充実を。
- ④情報欄の充実を。
- ⑤編集者はしばしば投稿をと呼びかけるが、一般の学生は投稿したものが編集者の趣味に合わないのではと恐れ、通常の投稿者は一部の人間に限られているというのは不正常である。

この意見への反応の意味か、次の52号の編集後記で、『南一中青年』は学生

に課外読み物を提供すると同時に、研究論文も発表できる学術雑誌の性格も併せ持つとしている。

55号で、文芸化しすぎているという批判に対し、編集部は次のように答えている。

- ①創刊以降一貫して、特集の文章を除くと文芸が主体の編集だった。最近数号ページ数が増えたためそうした印象を与えたかもしれないが、文芸主体は近刊で編集方針を変更したためではない。
- ②十数年前、文芸は学校で発展してきた、今日のように学校が文芸空白地帯のようになっている時にこそ、本誌は文芸の方向を重視しなければならない。
- ③文章の「荘厳」ということを取り違えてはならない。従来表現方式では十分には思想が伝わらない。本誌が目指すように新しい方式で思想を表現した方が受け入れられやすい。
- ④現在学生は勉強に忙しく、時間が有っても正当な課外読み物が不足している。本誌は、そうした正当な課外読み物を提供することで、読書で心身を整える習慣を作って欲しい。

やがて教育廳に文芸教育委員会が置かれ、「文藝到學校」運動が開始された。政府の科学教育重視と両輪になるようなものであるが、これにより学校文藝運動を進めるべしとし、学校は理科だけでなく文芸も重視するよう巻頭で訴えている。

その一方では57号では、ここ数号の文芸偏重だったが、本号で少し領域を拡大したこと（実際文芸は半分程度の紙幅になった）、戦訓報道が多いことが編集後記で記されている。

雑誌への文芸作品の投稿、あるいは編集に当たっている社員を一般はどのように感じていたのであろうか。47号に「我参加了南一中青年报社社員」という高校1年陳某の文章が有るが、ここから、教員が授業で南一中社員になるよう

呼びかけている様子や、高校までに何度も投稿して全く採用されないものがある（単純に「退稿」と言われる場合も、編集者の指導や批評が付いて戻されることもあったらしい）。一方、クラスに何度も掲載されてすでに「大作家」と目されるような学生が数名いることもうかがえる。そして、この文の筆者陳某はそうした大作家社員から入社を強く勧誘されている。

つまり、社員はいわば文芸部員で、編集者であると同時に作家でもあるわけで、編集後記には、投稿作への講評が記されたりもする。その目に適うのはなかなか難しいだろう。一方投稿してきた学生の一部は、文芸に関心ありとして社員になることを誘われるというわけである。社員でなくとも、投稿回数を重ねられる学生もいよう。

確かに、たとえば、60号では採用されている詩が17編あるが、3名が2編採用されている。こうした「常連」的な存在が、一般の投稿を躊躇させた面もあったであろう。一再ならず編集後記で、初中生の投稿は多い、高中生ももっと積極的に投稿をとというメッセージが書かれるのだが、このことは、初中時点で何回も投稿しても、不掲載が続くうちに投稿意欲が無くなる学生が多かったことを示しているのではなからうか。

卒業記念号の中には、社員の集合写真が入っているものがあるが、それを見ると社員自体はそれほど的人数ではない。2,000人規模の学校の一つのサークルとして考えたらむしろ少ないと言えるだろう。つまり、文芸意識の高い少数の学生が、全校学生に渡される雑誌を編集するという状況では、別の内容を求める意見が出て不思議はないという事である。

64号では、胡某の「談文藝寫作的民族性時代性及戰鬥性」という論文がある（p73）。胡は前号編集時まで南青社の社長だった学生であるが、ここで、61期以降原稿募集のスローガンとして「民族性・時代性・戰鬥性」を訴えてきたが、このいずれかに該当するような投稿が少なかったと述べている。民族性、すなわち民族の特徴とは、共通の血統、共通の言語、生活、習俗を有するという事であり、特に中華民族にあつては、その發展過程で最も發達したのが文学、一方時代性とは、内容がその時代の中心思想を表現するものである。戰鬥性と

は、かつての李白の「戦城南」、岳飛の「満江紅」のようなものが実例で現在の中華民国の状態でもそれは意識すべきだという。この社長の創作意識は限りなく当時の教育方針、思想教育に呼応したものであるが、それに呼応した作品が少ないという表白は、形式上公的理論にのっとりながら、一般の投稿が必ずしもそこに流されなかったことを物語っている。

3 結 語

この時期、導言で示したような雑誌はほぼ出そろいつつあった。民国 52 年(1963) 青年雑誌コンクールが行われ救國団が賞品を付けた。同年 5 月 17 日付「青年戦士報」に、第 1 回全国青年期刊比賽の結果が掲載されている。これは救國団がまず発刊した『幼獅』を扱う幼獅社が主催するもので、救國団総團部が審査した。

4 部門に分かれており、このことから、当時の校内文芸出版物を考える際、導言で示した大專の雑誌、中学の雑誌、県市の雑誌、校内新聞といった分類が適切なのが分かる。『南一中青年』はこの第 1 回コンクールで中学組第 2 位になった。⁽²²⁾

『南一中青年』がそうであったように、これらのうち多くは、救國団、もしくはその地方分部、校内の支部乃至大体が関与している出版物である。つまり救國団は、様々な形で校内文芸を初めとする青少年向け出版物を、その影響下におけた、ということになる。

台南地区で言うと、『南一中青年』は『南市青年』より早く刊行が始まっている。このことは、学校に置かれた救國団分部が、それぞれの校内雑誌を監督作

(22) ちなみに、大專部門は一等、政治大学の『大学生』、二等、淡江文理学院の『淡江学生』三等、師範大学の『崑崙』、四等、屏東農專の『南風』五等は青年作協大同工專分会の『青年節特刊』。中学が成功中学の『成功青年』、二等は『南一中青年』、三等台北市の市立強恕中学の『強恕青年』、四等屏東女中の『屏女青年』、五等連江縣馬祖島の『馬中青年』。縣市組は一等が宜蘭の『青年雑誌』、二等基隆の『青光』、三等『雲林青年』、四等『桃園青年』、五等は台北縣の『青年世紀』。校内新聞は一等台湾大学の『海風月刊』、二等『師大青年』、三等は『藝專青年』であった。なお、台南一中に保存されている『南一中青年』63期の表表紙には「青年戦士報」の記事がスクラップで張り付けてある。

成する段階を経て、より広域な青少年雑誌を別途発行する段階に進んだということである。

また、この時期の『南一中青年』は、投稿規定に明記されていないものの、⁽²³⁾ 実⁽²³⁾は学外の人間の投稿も受け付けていたらしい。

つまり、『南一中青年』は単に校内の文芸創作を拾っただけでなく、他校の文芸表現の場としての意味も有していた。このことから『南市青年』が発刊される前、その機能の一部を担っていたといえるのである。

なお、本論文では中華文化復興運動までの時期を扱ったが、やがて『南一中青年』はメインタイトルを『竹園崗』に変え、また発行者から救國団の名前は消え、南一青年社発行の、本来の意味での校誌になる。ただ、学生の、文芸創作の興味は低落傾向にあって、多数の投稿からごく一部を採択せざるを得ないといった状況にはなくなっていく。そうした変化については、次の分析対象としたい。

本論文の執筆の資料蒐集に当たり、台南一中の林皇徳先生に、台南一中での資料閲覧や複写に関して大変にご協力いただいたことに感謝し、ここに書き留めておきたい。

(23) 54号編集後記で、この期の特徴として、中学の投稿が多く、高校の方が少ないことに触れた後、一中以外の投稿が多い（屏女、南女、高女）と記している。

表 本論文使用『南一中青年』資料一覧

期	発行(民國曆)	西曆	表紙上の表示
37	46. 1. 1	1957	元旦特刊
39	46. 7. 3	1957	
40	46.10.31	1957	
43	47. 3. 29	1958	青年節特刊
45	47.10.31	1958	総統七秩晋二華誕特刊
47	48. 3. 29	1959	青年節特刊
49	48.10.31	1959	総統華誕特刊
50	48.12.14	1959	校慶特刊
52	49. 7. 5	1960	畢業特刊
53	49.10.31	1960	華誕特刊
54	49.12.14	1960	校慶特刊
55	50. 3. 29	1961	
56	50. 7. 1	1961	歡送畢業生特刊
57	50.10.31	1961	
58	50.12.14	1961	校慶及科學館落成特刊
59	51. 3. 29	1962	
60	51. 6. 25	1962	歡送畢業同學特刊
61	51.10.31	1962	
62	52. 1. 1	1963	元旦特刊
63	52. 3. 29	1963	
64	52. 6. 25	1963	歡送畢業生特刊
65	52.10.31	1963	
66	52.12.14	1963	81 届校慶特刊
67	53. 3. 29	1964	青年節特刊
68	53. 6. 27	1964	歡送畢業生特刊
71	54. 3. 29	1965	青年節特刊
76	55. 6. 24	1966	歡送畢業生特刊
78	55.12.14	1966	
79	56. 3. 29	1967	青年節特刊